

私にも 言わせて! 第153回

小児科医が勢いで飛び込んだ 行政医師の世界

「未知とワクワクが待っていました」



札幌市厚別区保健福祉部
健康・子ども課
医事担当課長

中山 加奈子

平成24年に旭川医科大学医学部を卒業後、市立札幌病院で2年間の初期研修を修了し、26年4月に北海道大学病院小児科に入局。その後、札幌市、釧路市、帯広市、苫小牧市の病院で小児科医として4年半勤務。30年10月より北海道大学大学院医学研究科で小児内分泌学の臨床研究を行い、令和5年に博士号を取得。同年4月より現職。

公衆衛生医師としてのキャリアの始まりは、かなり勢い任せな部分がありました。その先は、挑戦と学びが豊富な大変奥深い世界でした。日々、小児科医としての経験も生かしながら、公衆衛生医師としてのスキルアップに励んでいます。期待の若手というのおおこがましいですが、今回はこの場をお借りして、私がどういう人間なのか、皆さまでに自己紹介をさせていただきますと思います。

臨床医として

小学生の頃に書いたプロフィール帳では、将来の夢はすでに「小児科のお医者さん」となっていました。長い年月、小児科医師として働きたいと思っていました。初期研修でも、小児科の成長過程を見ていくという他科にはない特徴と、元氣になって帰っていく子どもたちとご家族の笑顔に「ここしかない」と思い定め、平成26年、念願かなって北海道大学小児科に入局しました。札幌市、釧路市、帯広市、苫小牧市と北海

道内で小児科医師として働いていた間は、指導熱心な先輩方や、熱意のある後輩に恵まれ、「ずっと（病院に）いますけど、いつ帰っているんですか?」と患者さんのお母さんに心配されながらも、充実した日々を送っていました。初期研修時代に糖尿病キャンプに参加したり、1型糖尿病病初発のお子さんと関わったりした経験から、特に興味があつた内分泌をサブスペシャリティーに選択し、大学院に入学したのが30年秋のことでした。

大学院では先天性甲状腺機能

低下症患者におけるAdiposity Reboundについて研究し、経時的な身長・体重バランスの変化から甲状腺機能低下症の重症度と将来的な肥満のリスクについて調べました。今となると、多くの身長・体重データを扱うにつれ、健常な子どもたちの発育についても、改めて自分の中の関心が高まっていたように思います。

行政医師となつたきっかけ

3年前の春、私は自分の将来の行き先について、正直とても悩んでいました。大学院は指導教官のご指導のおかげもあつて、修了のめどは立つたものの、院生生活は新型コロナウィルス感染症流行の影響で、各種学会は軒並みオンライン化し、医師・研究者が直接顔を見て交流することは少なく、研究を続けるためのコネクションもありませんでした。

「卒後どうするの?」と指導教官に聞かれども、完全に路頭に迷つたような心境でした。そんな時、ある人から「行政の仕事はどうか。チームワークがとても大切な仕事だけれど、向いていると思う」と声を掛けられたのが一大転機となりました。進路としてまったく想定外でしたが、幸いにも私にはモデルケースとなる先輩がいました。一つ上の学年で、直接指導もしていただいた古澤弥先生（当企画第78回執筆）と寺田健作先生（同第86回執筆）です。お二人ともとても優秀で優しい先輩でしたが、一足早く臨床から行政の世界に飛び込み、時折、学会やテレビユースで活躍されているお姿を拝見しておりました。札幌市は乳幼児健康診査が市の業務であるため、小児科医師としてのキャリアを生かせることも、私の心を後押ししました。ただ、私が札幌市で働いて

みたいと考え始めたのは大学院卒業の直前で、準備不足も甚だしい状況だったため、面接時に札幌市で何がやりたいかを問われた時に、「乳幼児健診以外に何ができるのか分からないので勉強します:」とお答えすることになったのは、今考えてもお恥ずかしい限りです。

区の保健センターへ

私の公衆衛生医師としてのキャリアは札幌市東区保健センターで始まりました。東区は札幌市内10区のうち、北区に次いで人口が多い区です。比較的慣れていると思ってい

なることがありました。ただ、同区と一緒に赴任された藤川知子先生が常にお手本となり、私が悩んでいるときには優しく肯定的なフィードバックをしてご指導くださったことは、とても幸運なことでした。

新しい人への挑戦

臨床時代は個々の患者さん、そのご家族と真剣に向き合っており、そこにもやりがいと間違いなくありました。行政に来てからはより広い視野で多くの部署の方々と協働する機会が増えました。

入職1年目の時に、乳幼児健診マニュアルの改訂ワーキンググループに参加する機会を頂きました。数名の医師職で率直に意見を出し合い、大学院の内分泌班で学んだことも生かしつつ、これからの札幌市の乳幼児健診において指標となるものをつくるという体験は初めてのことで、完成時の達成感はひとしおでした。

また、当市で機械による視覚スクリーニング検査を導入するに当たり、東区に先行区として白羽の矢が立つたため、正常・異常の判定、検査結果レポート、医療機関への紹介状など、母子保健担当部局と意見交

換しながら検査の枠組みをつくりました。他都市の取り組みを参考に、当市の状況に合わせた仕組みをつくる楽しさは想像以上でした。その他にも札幌市予防接種健康被害調査委員会に参加させていただいたり、区の衛生委員会に産業医として加えていただいたりと、これまで声を掛けていただいたものには、とりあえずすべての機会を無駄にするまいという精神で挑戦しています。現在、医師職向けの育成プログラム作成ワーキンググループにて、経験豊富な先生方に交じつて、新米公衆衛生医師の立場から自由に発言させていただきながら、私と同様に公衆衛生に興味を湧いた方や、これらの私自身の指針となるものが出来上がることを期待しながら取り組んでいます。

今後の展望

たった2年の経験でも、取り組む範囲は幅広く、次々と挑戦させていただく中で、次はどんなことができるだろうかという期待感を持ちながら、今年3年目を迎えました。公衆衛生医師として、経験するべきこと、学ぶべきことはまだまだ多

岐にわたりますが、自分の根幹にはどこかで子どもの未来につながる仕事があったという気持ちがあります。多くの子どもたちのより良い生活を実現するためには、制度面を常にブラッシュアップしていく必要があります。その動きの最前線にいるのが行政の医師であると日々の業務の中で実感しております。臨床とは異なり、即時的な実績としてはなかなか実を結ばないかもしれませんが、時間をかけて大きな変化を起こしていくという醍醐味を楽しみつつ、引き続き、さまざまな機会を糧にして精進してまいりたいと思います。

最後に

今回、執筆の機会を紹介してくださった、旭川市健康保健部長（前札幌市保健所長）の山口亮先生、日頃より熱いご指導をいただいている札幌市医師職の皆さま、日々一緒に奮闘してくださる区の職員の皆さまに心より感謝申し上げます。また今後、さまざまな場面で当企画をご覧になる皆さまにお世話になることがあるかと思いますが、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。